

がん社会 を診る

中川 恵一

オーストラリアの歌手、女優で実業家でもあるオリビア・ニュートン・ジョン(69)

は25年前に治療した乳がんの再発のため、6月に予定していた北米コンサートツアーを延期しました。私も中学生のころに聴いた「そよ風の誘惑」を思い出しました。

四半世紀前に治療して完治したと思われていた乳がんが骨に転移したようです。彼女の体のどこかに潜んでいた乳がん細胞が免疫状態の低下などの理由で活動を再開したものと考えられます。私も同じようなケースを何回か経験したことがあります。

実は厳密に言えば、がんには「完治」という概念はありません。乳がんに限らず、前立腺がんなどでも、治療後10年もたつてから再発することは珍しくありません。

結核やインフルエンザなどの感染症では、体内の細菌や

珍しくない10年超の再発

ウイルスの数がゼロになれば完治といえます。しかし、がんの場合、微小な病巣が体内に残っていないとはいえませんが、そもそも、がん細胞は新たに毎日多数発生しています。「キャンサーフリー」な人などいないわけです。

しかしほとんどのがんは、治療から5年後には再発リスクがますます高くなります。全国がんセンター協議会のデータでも、胃がんの5年生存率は73%、10年生存率は69%と4割しか違いません。大腸がんでも、それぞれ75・8%と69・8%と6割の差にすぎません。こうしたタイプのがんでは事実上、5年生存率と治療率は限りなく近いといえますので、経過観察を5年で打ち切るのが普通です。

一方、乳がんの5年生存率は92・9%ですが、10年生存率は80・4%と12割以上も低下します。乳がんだけでなく肝臓がんなどでも、発症から10年くらいまで生存率がほぼ直線的に下がります。10年を超えると再発は少なくなるとはいえ、オリビアのようなケースは決して珍しくありません。治療から34年後に原発部位から再発した例を経験したこともあります。私の場合、がんの種類によっては治療から10年以降も受診していただけようにお願ひしています。

がんのやっかいな点の一つが、治療後も長い間完全には安心しきれないことです。禁煙や運動などで、発症のリスクを下げるのが大切である理由がそこにあります。

(東京大学病院准教授)



イラスト・中村 久美